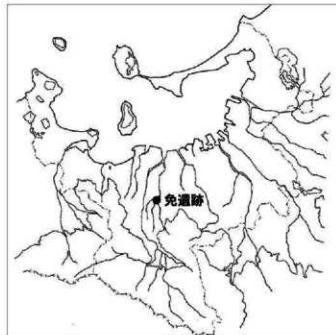


# 免遺跡 2

— 第3次調査報告 —



遺跡名号 MEN-3  
調査番号 0712

2009

福岡市教育委員会



1. 埋設土器 (1)



2. 大洞系土器 (238)



3. 天河石 (414)

## 序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、本市におきましてはこれらの保護と活用に取り組んでいるところであります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていることも事実です。本市教育委員会では開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存に努めています。

本書は、金屑川河川改修工事に伴い調査を実施した免遺跡第3次調査の成果を報告するものです。今回の調査では弥生時代の自然流路から多量の土器・石器などが出土しました。これらは、当時の賀茂地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣

## 例　言

1. 本書は金屑川河川改修工事に伴い、早良区賀茂四丁目地内において発掘調査を実施した免遺跡第3次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いた方位はすべて磁北である。
3. 本書で使用した遺構の呼称は、溝をSD、ピットをSPと略号化している。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は今井隆博が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、土器を今井が、石器を山口謙治、山口朱美が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製作は米倉法子、山口朱美、今井が行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は今井が行った。
8. 石器については山口謙治の御教示を得た。
9. 本書に関する遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
10. 本書の執筆・編集は今井が行った。

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	2
第3章 調査の記録.....	4
1. 調査の概要.....	4
2. 層序.....	4
3. 遺構と遺物.....	7
第4章 おわりに.....	31

## 挿図目次

第32図 天河石分析チャート

第1図 免遺跡と周辺の主な遺跡 (1/100000)	表目次
第2図 調査地点と周辺の調査区 (1/8000)	
第3図 調査区位置図 (1/1000)	第1表 出土石器観察表
第4図 調査区全体図 (1/200)	
第5図 調査区土層図 (1/60)	図版目次
第6図 埋設土器出土状況実測図 (1/10)	
第7図 埋設土器実測図 (1/3)	図版 1
第8図 SD01出土遺物実測図 (1/3)	1. 1区砂層上面全景 (北より)
第9図 3層出土土器実測図① (1/3)	2. 1区砂層上面全景 (西より)
第10図 3層出土土器実測図② (1/3)	3. 1区完掘状況 (北より)
第11図 3層出土土器実測図③ (1/3)	4. 1区完掘状況 (西より)
第12図 3層出土土器実測図④ (1/3)	5. 2区砂層上面全景 (東より)
第13図 3層出土土器実測図⑤ (1/3)	6. 2区完掘状況 (東より)
第14図 3層出土土器実測図⑥ (1/3)	図版 2
第15図 3層出土土器実測図⑦ (1/3)	1. 北壁土層 (南東より)
第16図 3層出土土器実測図⑧ (1/3)	2. A6~C6土層 (南より)
第17図 3層出土土器実測図⑨ (1/3)	3. B3~F3土層 (南東より)
第18図 25・26層出土土器実測図 (1/3)	4. 試掘トレンチ西壁土層 (南東より)
第19図 4層出土土器実測図 (1/3)	図版 3
第20図 5層出土土器実測図① (1/3)	1. SD01完掘状況 (南より)
第21図 5層出土土器実測図② (1/3)	2. SD02 (北より)
第22図 3、5層出土土器実測図 (1/3)	3. SD03完掘状況 (北より)
第23図 6層出土土器実測図 (1/3)	4. SD03完掘状況 (南より)
第24図 8層出土土器実測図 (1/3)	5. 埋設土器出土状況 (北より)
第25図 砂層出土土器実測図 (1/3)	6. 322出土状況 (北より)
第26図 層位不明土器実測図 (1/3)	図版 4 出土遺物 I
第27図 土製品・玉実測図 (1/2, 1/1)	図版 5 出土遺物 II
第28図 出土石器実測図① (1/1)	図版 6 出土遺物 III
第29図 出土石器実測図② (1/1)	図版 7 出土遺物 IV
第30図 出土石器実測図③ (1/1)	図版 8 出土遺物 V
第31図 出土石器実測図④ (1/1)	

## 第1章 はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成17年8月31日、下水道局河川部河川建設課（現道路下水道局河川部河川整備課）より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現埋蔵文化財第1課、以下、埋文1課）に対して、福岡市早良区賀茂四丁目地内における河川改修工事に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受け埋文1課では、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である免遺跡および次郎丸高石遺跡に隣接していることから、平成19年4月18日に試掘調査を実施した。試掘トレンチで4箇所を確認した結果、トレンチ2において現地表下約90~110cmで弥生時代前期の遺物包含層を確認した。この結果に基づいて申請者と埋文1課は協議を行い、遺跡の存在が予想される部分を対象として、記録保存のため発掘調査を令達事業として実施することで合意した。発掘調査は平成19年5月14日から同年6月29日まで実施した。整理作業と報告書の刊行は平成20年度に行った。

調査番号	0712	遺跡略号	MEN-3
調査地地積	早良区賀茂四丁目地内	分布地図番号	野芥83
開発面積	5,000m <sup>2</sup>	調査実施面積	250m <sup>2</sup>
調査期間	2007.5.14~2007.6.29	事前審査番号	17-1-60

### 2. 調査の組織

調査委託：下水道局河川部河川建設課（現道路下水道局河川部河川整備課）

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査統括：埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治（前任） 田中壽夫（現任）

調査第1係長 杉山富雄

調査庶務：文化財管理課 管理係 井上幸江

事前審査：埋蔵文化財第1課 事前審査係 星野恵美

調査担当：埋蔵文化財第2課 調査第1係 今井隆博

調査作業：尾崎泰正 小田義之 菅野武 柴藤清志 田中昭子 永井ゆり子 西口キミ子

西鶴ムラ子 西鶴洋子 野田英機 土生ヨシ子 藩坂ミサヲ

整理作業：柴田加津子 萩本恵子

尚、発掘作業から報告書作成に至るまで、道路下水道局の方々をはじめ地域住民等関係各位には多大な御協力と御理解を頂きました。記して感謝する次第です。

## 第2章 遺跡の立地と環境

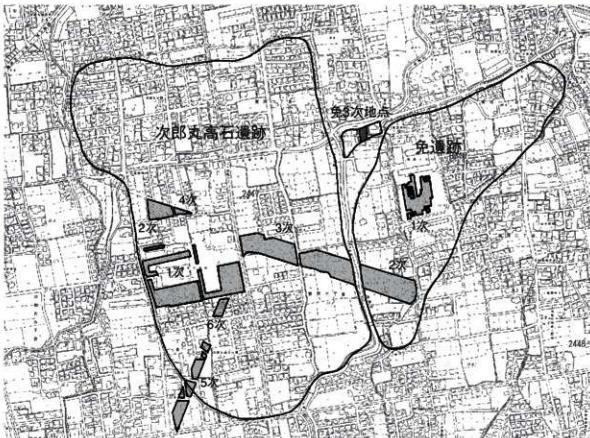
早良平野は福岡市西部に位置し、福岡平野と糸島平野に挟まれている。北は博多湾に面し、南は脊振山地・東は油山丘陵・西は長垂丘陵に囲まれている。平野内は室見川・金屑川などの多くの支流が縱断し、平野内の地形形成に影響を及ぼしている。免遺跡は早良平野のはば中央東寄りに位置し、金屑川の右岸にある。周辺には西に次郎丸高石遺跡、東に野芥大藪遺跡、野芥遺跡がある。

本調査地点は免・次郎丸高石兩遺跡の隣接地にあたる。調査地点南東にある賀茂小学校では免遺跡第1次調査（鶴町遺跡）が実施されており、自然流路から柵状遺構が検出され、弥生時代前期～古墳時代の土器とともに大量の木製品が出土している。また、本調査地点より300mほど南では外環状道路建設工事に伴い2次調査が行われ、古墳時代の流路からアーチ状の井堰が検出されている。

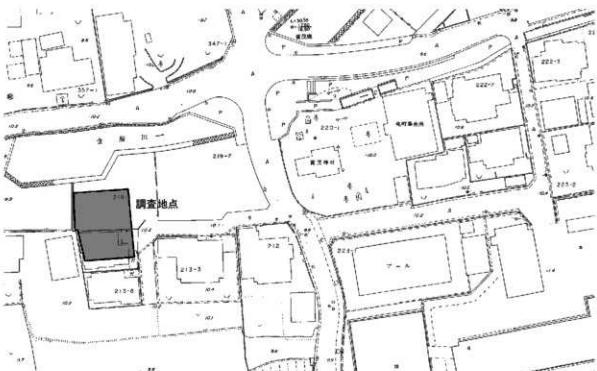
早良平野における弥生時代開始期の主な遺跡には、平野のはば中央付近に有田遺跡群がある。室見川と金屑川に挟まれた独立中位段丘上に立地し、旧石器時代～近代までの遺跡が存在する。弥生時代開始期前後には遺跡の南半に環濠が築かれて、当該期の中心的集落と思われる。遺跡の南西端には夜白式土器が大量に出土した第62次調査地点（七田前遺跡）がある。有田遺跡群の西、室見川と十郎川の間には福重縄木遺跡・橋本一丁田遺跡・拾六町平田遺跡・石丸古川遺跡など、当該期の遺物が大量に出土した遺跡の密集地域となる。これらの遺跡は自然流路や河川跡が多く、明確な遺構は少ない。有田遺跡群の南には免遺跡・次郎丸高石遺跡・野芥大藪遺跡・田村遺跡などがある。次郎丸高石遺跡では溝状遺構から突帯文土器が出土している。早良平野の南端には四箇遺跡・重留遺跡・清末遺跡などがあるが、遺物の出土は少ない。



第1図 免遺跡と周辺の主な遺跡 (1/100000)



第2図 調査地点と周辺の調査区 (1/8000)



第3図 調査区位置図 (1/1000)

### 第3章 調査の記録

#### 1. 調査の概要

平成19年5月14日から表土剥ぎに着手し調査を開始した。表土剥ぎの際の廃土は場外に搬出し、人力掘削による廃土は調査区を2つに分けて場内に処理することとした。調査区内を2mのグリッドに区画し、東西をアルファベット、南北を数字であらわしグリッド番号を付けた。そして、5列と6列を境として、南側を1区、北側を2区として掘り進めた。本調査区は微高地の端と谷の部分にあたり、包含層の堆積が主で人為的な造構はほとんど見られない。南西隅にわずかに黄褐色粘質土の微高地がかかり、東と北に向かって落ちていく地形である。微高地部分の標高は9.4m、谷の底の砂礫面は約8.6mである。一部深いところは8.2mを測る。

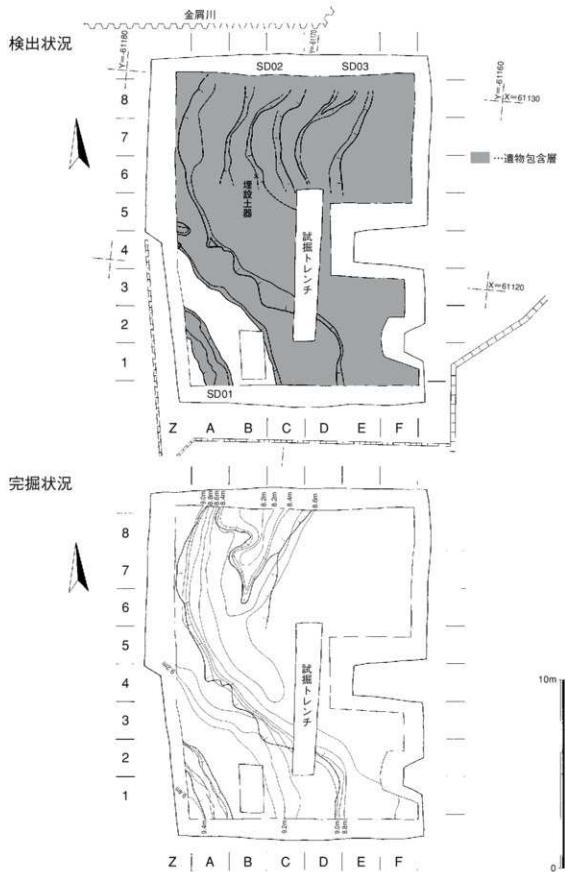
検出した造構は埋設土器1基と自然流路3条である。掘削は先に設定した2mグリッドを基準に掘り進め、出土遺物の大半はグリッド単位で取り上げた。第4図の薄い網掛け部分は遺物包含層の分布範囲で、調査区のほぼ全面を覆っている。流路の覆土下部は砂と粘土の互層で、その上に黒褐色粘質土が堆積していた。黒褐色粘質土は上層（3層）と下層（5層）に分けて遺物をとりあげてある。遺物は3層のものが最も多い。出土遺物は夜臼式土器を中心で、板付式土器が少量共伴する。土器には煤が付着したものも見られる。その他に土製筋鉢車、大洞系土器、磨製石斧、磨製石剣の切先、天河石（アマゾナイト）などが出土した。黒曜石片は500点以上出土し、石礫・石錐・搔器・削器・使用痕跡片・残核などがある。また黒曜石原石も出土している。遺物は総量でコンテナケース約30箱分出土した。

#### 2. 層序

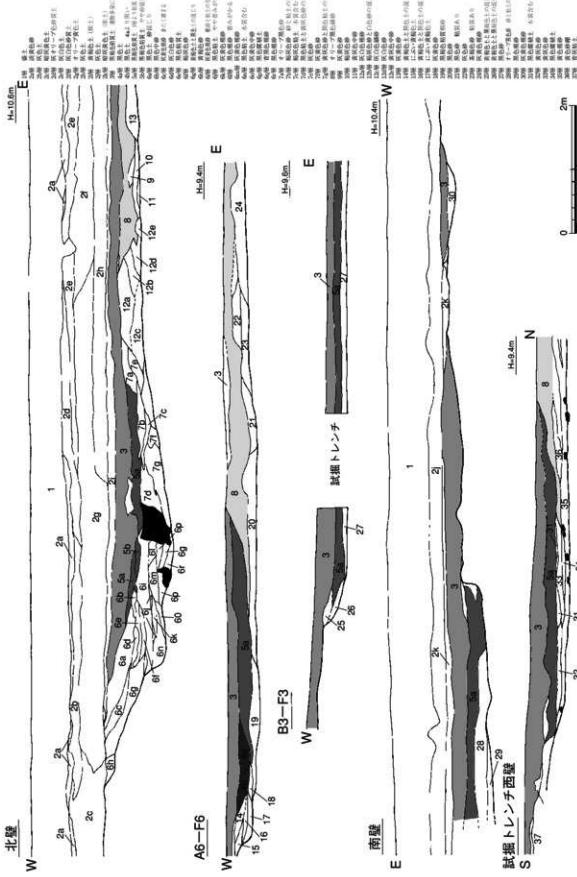
第5図は北壁、A 6-F 6ベルト、B 3-F 3ベルト、南壁、試掘トレンチ西壁の土層図である。北壁における地表面からの基本層序は、1層：盛土（約60cm）、2a～2e層：灰色土（約20cm）、2g層：オリーブ黄色土（約40cm）、2i層：黄褐色土（約5cm）、3・5層：黒褐色粘質土（5～40cm）、6層：黒褐色繊砂、粗砂、砂礫となる。

掘削時の平面観察からは土質の識別が難しく、流路の把握が困難であったが、土層断面からは比較的明瞭に識別することができた。北壁土層では砂の高まり（12層）を挟んで両側に流路が見られる。西側のSD02では黒褐色粘質土（3・5層）の下は砂と粘土が層状に堆積している（6・7層）。高まりの東側では浅い窪（SD03）に8層が落ちこんでいるのが確認できる。A 6-F 6ベルトでは、3層と5層の間に黒色土（4層）を確認した。4層は狭い範囲に分布するようであるが、出土遺物は比較的多く、接合できる資料も多い。B 3-F 3ベルト、および南壁では3層、5層とともに水平気味の堆積となっており、疊層もほぼ平坦になっている。試掘トレンチ西壁では3層と5層の堆積、8層の落ちが確認できる。

黒褐色粘質土の下は砂層、その下は疊層となる。調査最終段階で重機による深掘りを行ったが、疊層の下を確認することはできなかった。遺物の大半は3層からの出土で、4層・5層にもある程度見られる。その下の砂層などからも少量出土している。遺物は極力分層して取り上げたが、境界が不明瞭な部分や壁からの落ち込み、層の誤認などで混じり込みもあると思われる。



第4図 調査区全体図 (1/200)



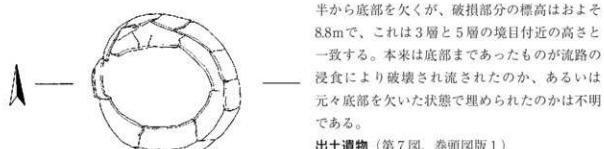
第5図 調査区土層図 (1/60)

第5図 調査区土層図 (1/60)

### 3. 遺構と遺物

#### ①埋設土器 (第6図、図版3-5)

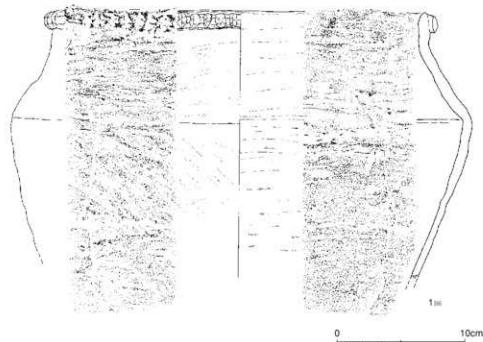
B 6 グリッドの5層からの出土である。SD02の窪み部分で検出した。口縁部を下にした倒置状態である。検出段階では掘方を確認することはできなかったが、倒置状態であること、土器がまとまといた状態であることから埋設土器と判断した。屈曲部付近で割れ、潰れた状況で出土した。胴部下半から底部をくぐり、破損部分の標高はおよそ8.8mで、これは3層と5層の境目付近の高さと一致する。本来は底部まであったものが流路の浸食により破壊され流されたのか、あるいは元々底部を欠いた状態で埋められたのかは不明である。



#### 出土遺物 (第7図、図版1)

突帯文系の屈曲甕である。口径31.0cm、遺存高21.0cm。胴部で屈曲するもので、口縁部のみに刻目突帯を施す。突帯は口縁部にはば接する位置に若干下向きに貼り付けられている。突帯の幅は大きく、厚みもある。また、刻目も大きく、貝殻で施されている。調整は粗雑で、外面は擦過痕、内面にはナデ、擦過痕、ケズリ状の痕跡が見られる。早良平野における同様の屈曲一条甕と比較すると粗雑な印象を受ける。

第6図 埋設土器出土状況実測図 (1/10)



第7図 埋設土器実測図 (1/3)

## ②自然流路

### SD01 (第4図、図版3-1)

調査区南西隅の微高地部分で検出した。幅はおよそ1.2mであるが、深さは15cm程度しかなく遺存状況は非常に悪い。覆土は黒褐色粘質土で、谷部の3層と同一層と思われる。底面にはわずかに砂が残っている。断面はゆるいU字形で明瞭な掘り込みは確認できること、谷の落ち際の方向とはほぼ平行に並んでいることから、SD01は自然流路の浸食によるもので、後の浸食・削平により崖の底だけが遺存したものと判断した。

### 出土遺物 (第8図、第31図)

突帯文土器・板付式土器が少量出土した。2~7は突帯文系の甕口縁部である。突帯が口縁部より下がるもの、口縁部に接するもの、刻目が指頭のもの、棒状工具によるものなど様々である。8・9は板付系甕の口縁部である。ともにヘラによる刻目を端部全面に施す。10・11は甕の肩部で、平行沈線を施す。12~15は底部である。12は台形状に張り出す夜白式甕の底部である。

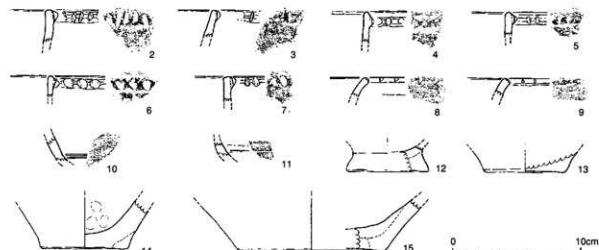
また、石器は太型蛤刃石斧、黒曜石製石鎌未製品・削器・石核・使用痕剥片などが出土している。466は今山産と思われる玄武岩で、現存の長さ12.0cm、幅6.65cm、厚さ4.9cmである。敲打製形後に頭部から体部にかけ入念に研磨を加え、半円状の頭部を作り出し、横断面は楕円形に仕上げている。使用中に欠損したものであろうか。

### SD02 (第4図、図版3-2)

谷部のB4からB8付近で3層を除去した段階で検出した。先に調査を行った1区部分では明瞭な流路は検出できなかったが、北側の調査成果を踏まえると、3層下の5層はSD02に伴うものであったと思われる。よって、SD02は南東から北西に流れていたものと思われ、8層、砂層を除く出土遺物の大半はSD02のものと思われる。1区では3層・5層およびその下層は平坦な砂礫層であるが、北側はB7付近で急激に深くなり、堆積層も砂・粘土・腐植土などが見られる。出土遺物は谷部のものでまとめて報告する。

### SD03 (第4図、図版3-3、4)

調査区北東部で3層を除去した段階で検出した。幅2m前後、深さ20~30cmである。砂層(12層)を削っている。D5より南側では平面・土層断面とともに溝状のものは確認できていないことから、D5付近で途切れるのか、あるいは東側に曲がっているものと思われる。出土遺物はほとんどない。



第8図 SD01出土土器実測図 (1/3)

## 谷部及びSD02・03出土遺物

SD02・03を含む谷部出土遺物をまとめて報告する。なお、土器については出土層毎にまとめて掲載しているが、土製品・玉、石器は層に関わらずまとめて報告する。

### (1) 土器

#### 3層出土土器 (第9図～第17図)

谷部上面のほぼ全面を覆う層である。16～140は口縁部に刻目突帯を施す砲弾甕、141～164は屈曲甕、165～173は板付系の甕である。174～190は浅鉢、191～250は壺、251・252は楕形土器、253・254は高杯である。255～313は深鉢・甕、浅鉢、壺の底部である。大半が小片のため、復原径・傾きが正確なものも多いと思われる。

突帯文系の砲弾甕は口縁部の傾きで大きく分けた。16～28は口縁部から直線的にすぼまる胴部を持つものである。突帯は口縁部に近いものが多く、刻目はヘラ、棒状工具のものが多い。26は摩滅のため不明瞭であるが、刻目を施していないように思われる。28は指頭による大きな刻目を有する。16・27は外面に条痕が見られる。他のものは板ナデ、擦痕である。

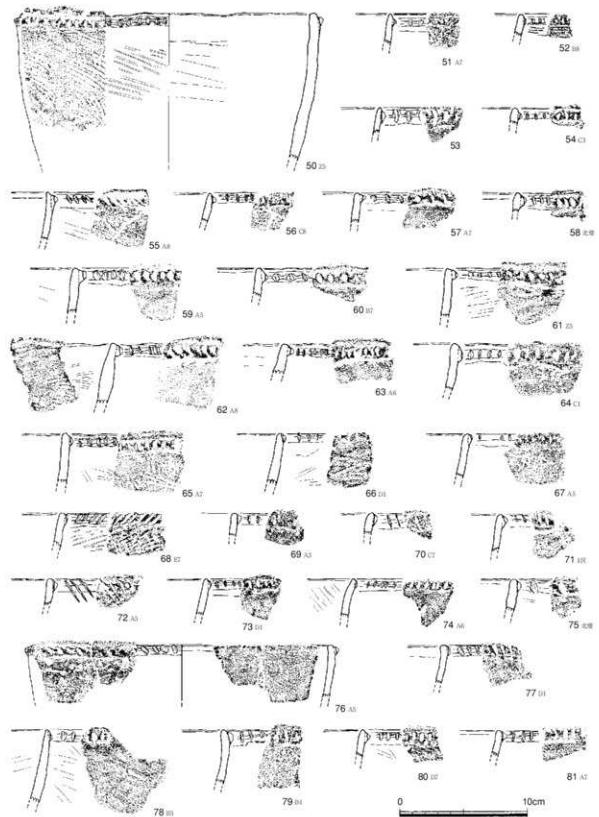
29～103は口縁部から湾曲しながらすぼまる胴部を持つものである。そのうち29～41は突帯位置が口縁部より5mmほど離れたもので、棒状工具による断面U字形の刻目が多い。37は内外面に条痕が残る。42～58は口縁部より2mmほどわずかに下がった位置に突帯を貼り付けたものである。42～51はヘラ状工具による断面V字形の刻目で、52～58は棒状工具による断面U字形の長い刻目である。49・50・52は外面に条痕が残る。59～81は口縁部に接してやや下向きに突帯を貼り付けたものである。59～61は指頭または棒状工具による丸みをもつ刻目、62～72はヘラ状工具による断面V字形の刻目、73～81は棒状工具による断面U字形の長い刻目である。68は外面に条痕が明瞭に残り、刻目は斜めにつけられている。72の刻目は深く長く、突帯下部にまで達している。82～99は突帯が口縁部に接して、上面に平坦面を有するものである。82・86は指頭による刻目、87～99は棒状工具による断面U字形の長い刻目である。86は刻目の下方が盛り上がりであることから、上方から下方への刺突による施文と思われる。刻目の下側に粘土が膨らんでいるものは少ない。91・92は外面に条痕が残る。口縁部上面に平坦面を有するものには断面U字形の刻目が多いように思われる。100～103は口縁部よりも上にはみだして突帯を貼り付けたものである。100～101は断面U字形の刻目、102は指頭による刻目、103はヘラ状工具によるV字形の刻目である。

104～138は直立気味の口縁を持つものである。104～109は突帯位置が口縁部より5mmほど離れたもので、104は指頭による刻目、105はヘラ状工具による断面V字形の刻目、106～109は棒状工具あるいはヘラ状工具による刻目である。105は施文の際のヘラの痕跡が突帯の上下部分にまで及んでいる。110～112は口縁部より2mmほどわずかに下がった位置に突帯を貼り付けたもので、110は指頭による刻目、111は棒状工具による円形の刻目、112は断面U字形の長い刻目である。113～124は口縁部に接してやや下向きに突帯を貼り付けたものである。113・114は指頭または棒状工具による円形の刻目、115は貝殻による刻目、116・117はヘラ状工具による断面V字形の刻目、118～124は棒状工具による断面U字形の長い刻目である。125～134は突帯が口縁部に接して、上面に平坦面を有するものである。刻目は125が貝殻、126～129がヘラ状工具による断面U字形、130～133が棒状工具による断面U字形、134は小さく浅い円形のものである。129・130は条痕が残る。135・138は口縁部よりも上にはみだして突帯を貼り付けたもので、いずれも断面U字形の刻目である。

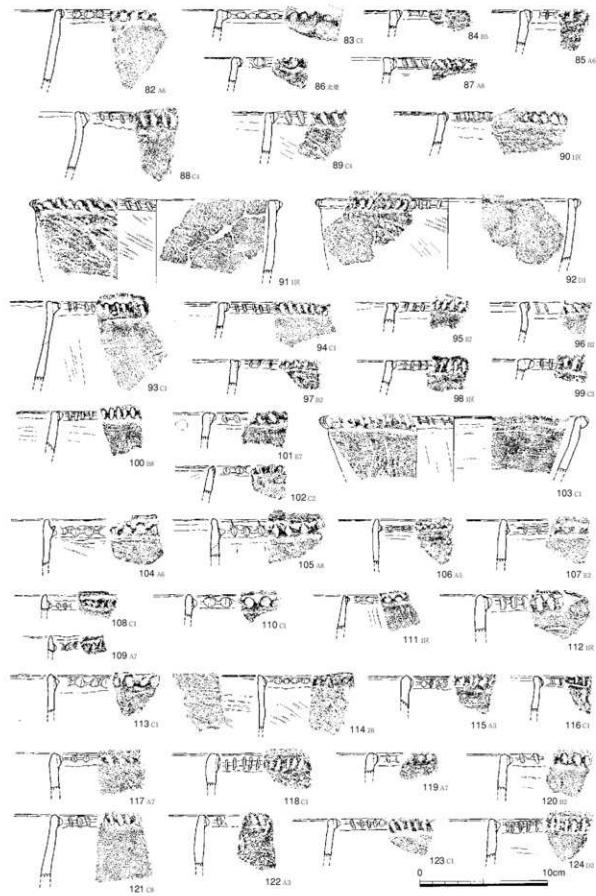
139・140はやや小型の鉢形土器と考えた。139は口縁部より離れた位置に突帯を貼り付けている。ともに内面には条痕が残る。



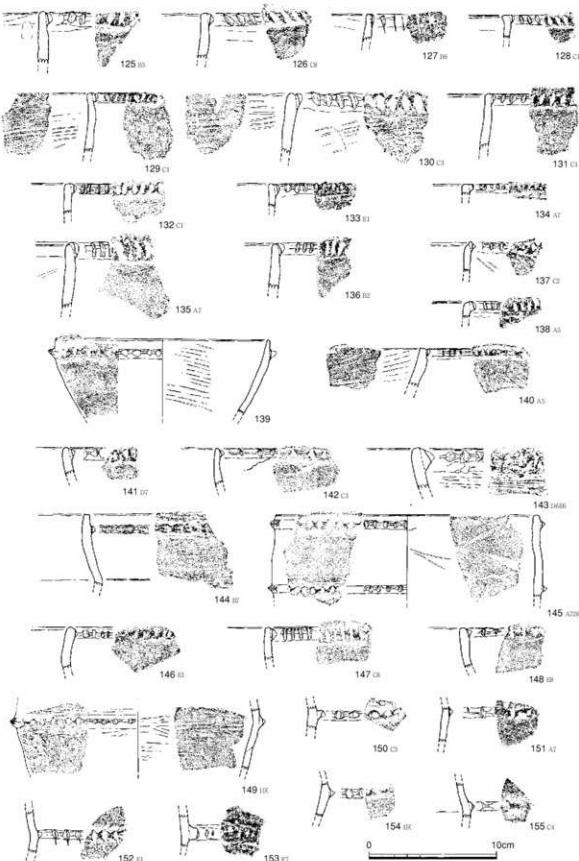
第9図 3層出土土器実測図① (1/3)



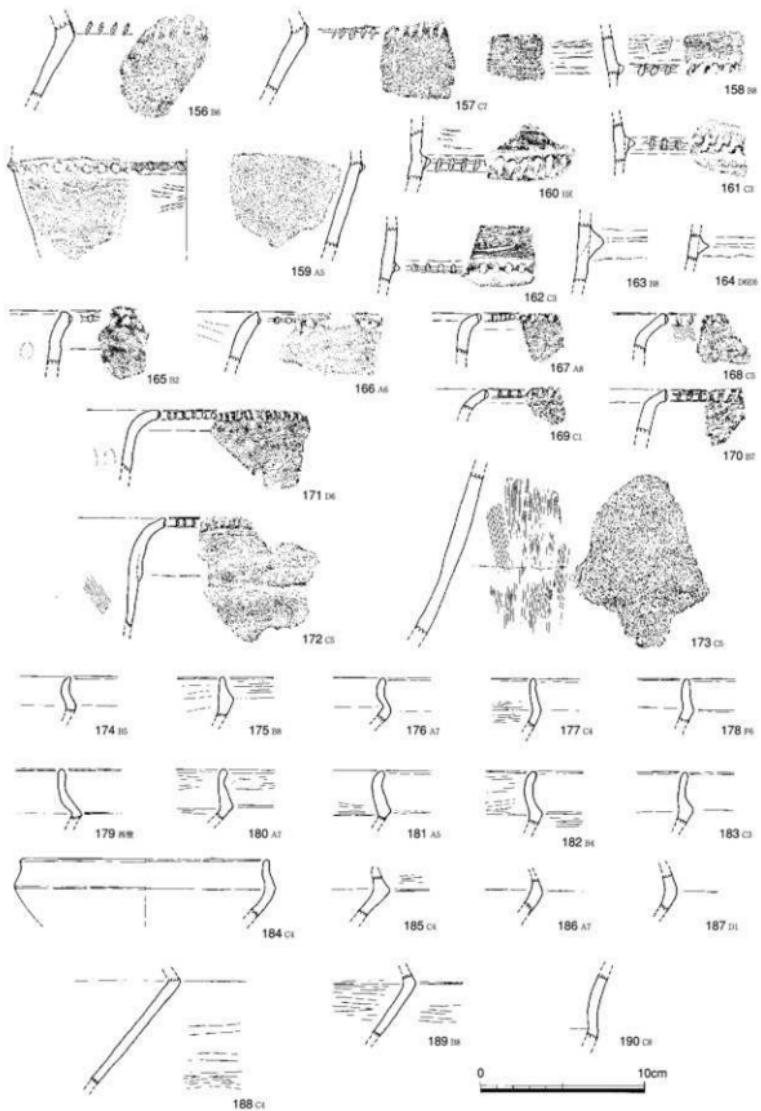
第10図 3層出土土器実測図② (1/3)



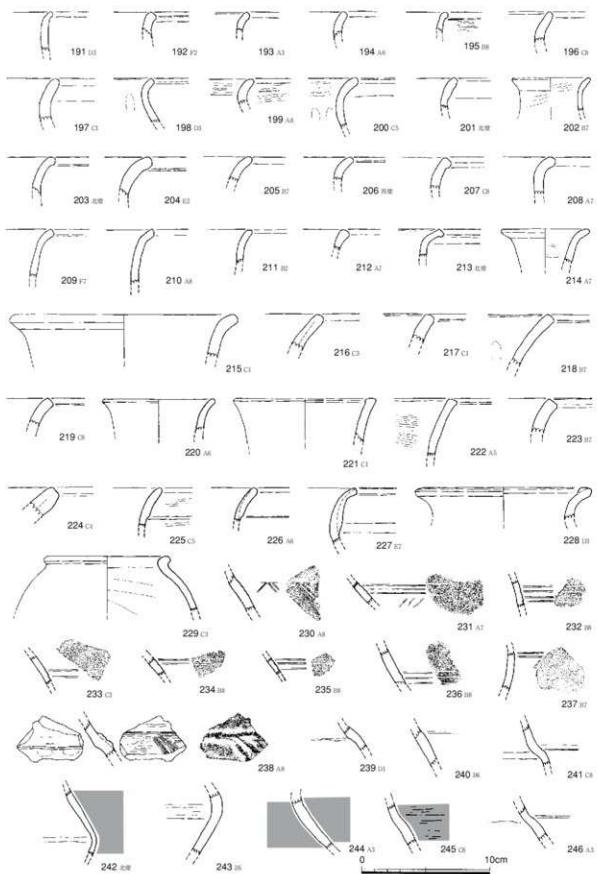
第11図 3層出土土器実測図③ (1/3)



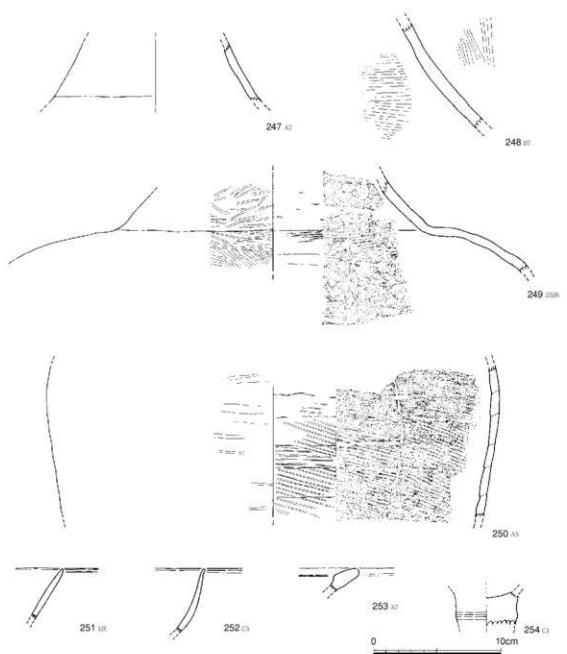
第12図 3層出土土器実測図④ (1/3)



第13図 3層出土土器実測図⑤ (1/3)

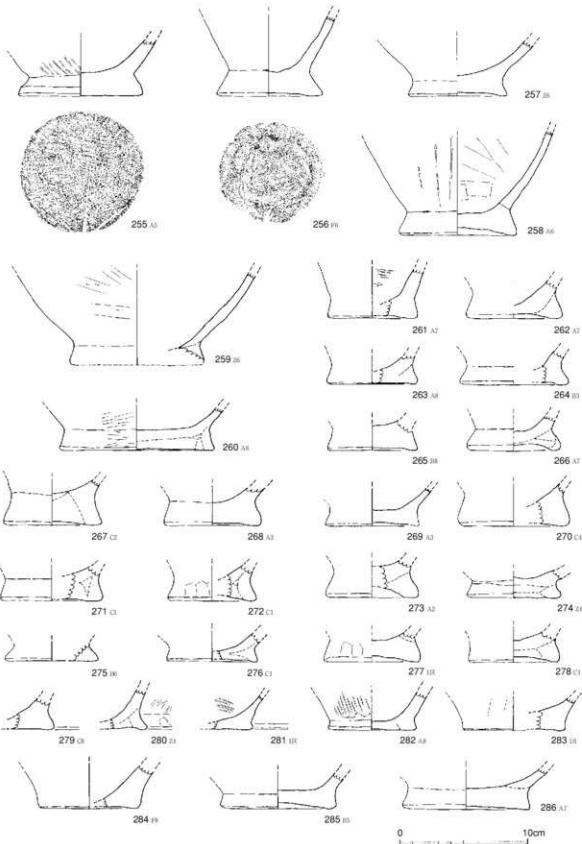


第14図 3層出土土器実測図⑥ (1/3)

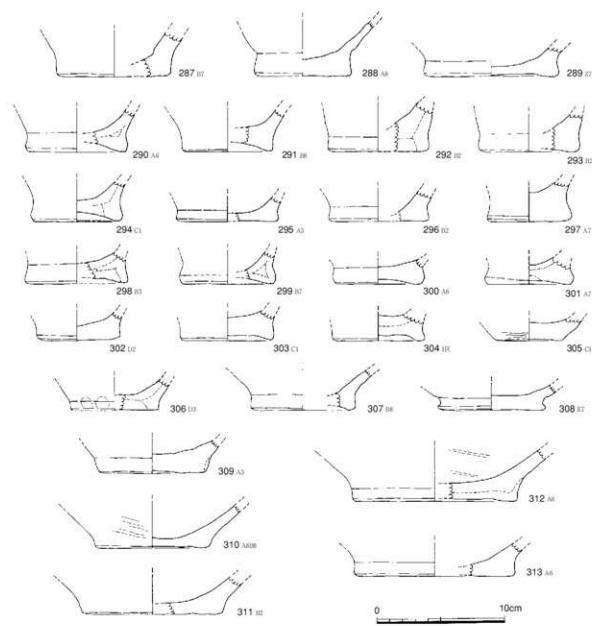


第15図 3層出土土器実測図⑦ (1/3)

141～164は屈曲壺である。口縁部と屈曲部ともに突帯を施すものと、口縁部のみに突帯を施すものが見られる。143は器壁が厚く、突帯も大きい。貝殻で施文されており、1の埋設土器と似た印象を受ける。144は口縁部のみに突帯を施す。刻目は貝殻と思われるが、他に類似の刻目は見当たらず、特徴的なものである。内外面の調整はヨコナデである。145～148は断面U字形の刻目である。145は屈曲部からほぼ直立する口縁を持つ。149～164は屈曲部破片である。150・154は指頭または棒状工具による円形の刻目、151～153、155～157はヘラ状工具による断面V字形の刻目、158～162は断面U字形の刻目である。大半が断面三角形の突帯であるが、153は断面コの字形の突帯である。163・164は断面三角形の大きな突帯で、ともに刻目を施さないものである。



第16図 3層出土土器実測図⑧ (1/3)



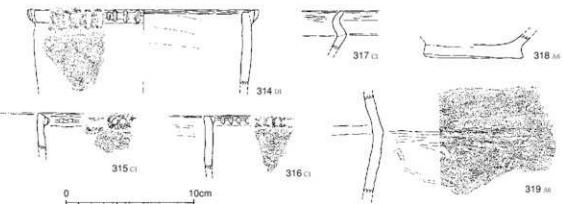
第17図 3層出土土器実測図⑨ (1/3)

165～173は板付系の甕である。165・166は口縁部がわずかに外反し、端部に小さな刻目を施すもので粗形甕と考える。167～172は、くの字形あるいは如意形の口縁で、口縁端部全面に刻目を施している。168は外面にハケメが見られる。172は口縁の下に段を有するものである。173は甕の脚部下半で、外面にハケメが見られる。

174～190は浅鉢である。174～184は口縁部で、端部が鋭く屈曲するもの、湾曲するもの、直線的なものなど、バリエーションがある。研磨を施すものが多い。185～189は屈曲部の破片である。

190は小片で器種・傾きが不明であるが、波状口縁をもつ浅鉢の屈曲部と考えた。

191～250は壺である。191～224は夜白式甕の口縁部と考えたが、高杯の脚部が混じっている可能性がある。直立気味の口縁に壺部がわずかに外反するもの、内傾する頸部に口縁が外反するもの、頸部から外側にひらく口縁をもつものなどがある。225～227は口縁部外面が肥厚する板付式甕である。228は口縁部内面を肥厚させるもの、229は肩部で外反しておさめる短頸の壺である。230～



第18図 25・26層出土土器実測図 (1/3)

237は沈線文をもつ肩～胴部破片である。230は複線山形文、他は平行沈線文である。238～250は頭部・肩部・胴部の破片である。小片のため傾きが不正確なものもある。238は縦線を有する肩部破片である。頭部と胴部の境目に横方向の隆線が1条、そこから斜め方向に派生する隆線が2条ある。外面はうすい黒褐色で、横方向の研磨調整。隆線の両側は、隆線に沿って研磨を施している。大洞系土器との教示を得た。249は大型壺の肩部である。口縁部と胴部を欠くが、肩部はほぼ全体が遺存する。肩の張りが強い。外面は研磨、内面は条痕が残る。250は大型壺の胴部である。傾き、天地は不確実である。内面は幅2cm程の粘土紐の単位が明瞭に識別できる。外面の調整は研磨、内面は条痕が残る。

251・252は椀形土器である。251は口縁端部外面が沈線状にわずかに窪んでいる。253は高杯の口縁部か。口縁端部内面に段を有する。254は高杯の杯と脚の接合部である。段の痕跡がわずかに残る。

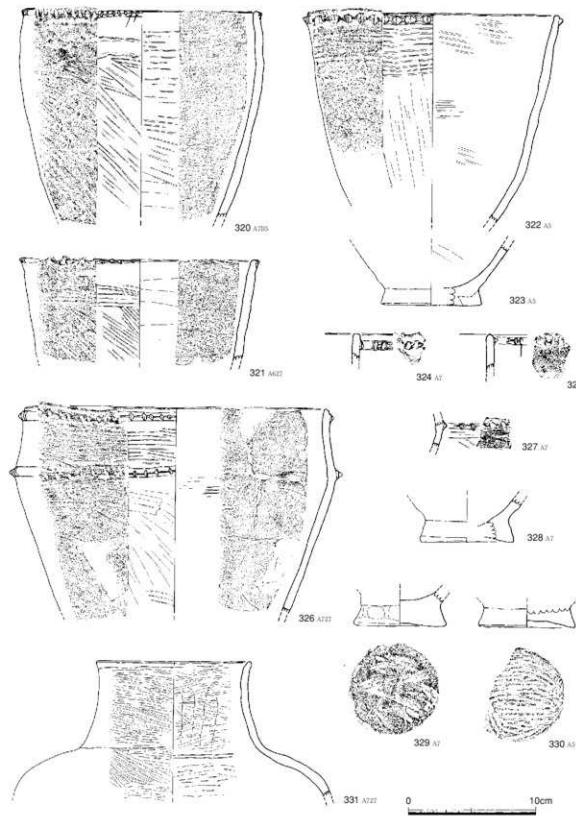
255～313は底部である。接合痕を識別できるものも多い。255～280は外側に張り出す台形状の底部である。255は底部外面に木葉痕が見られる。256の底部外面は不定方向のケズリによりわずかに上げ底となっている。281・282は器壁が薄い。浅鉢の底部であろうか。

#### 25・26層出土土器 (第18図)

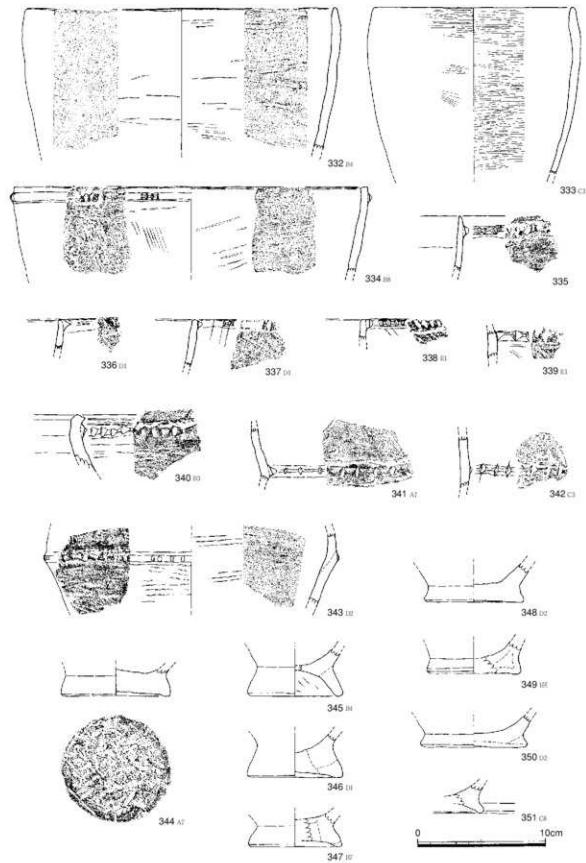
谷の西側肩 (B 3、C 3付近) の3層の下の黄褐色粘質土と黑色土が混じった層から出土した遺物である。314～316は砲弾型である。314は口縁部より上方にはみ出す突部を貼り付け、断面U字形の長い刻目を施す。315は棒状工具による小さな丸い刻目、316はヘラ状工具による断面V字形の刻目である。317は浅鉢の口縁部で、端部の外反が鋭い。内外面ともに研磨を施す。318は底部、319は深鉢の屈曲部である。

#### 4層出土土器 (第19図)

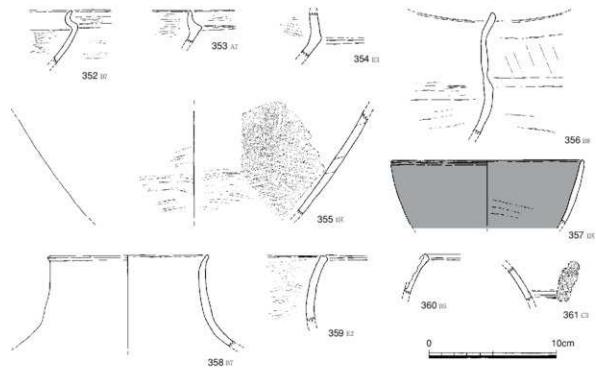
4層は、A 5、B 5グリッド付近の3層の下で見られた黒色土で、接合復原できた土器が多い。320～322・324・325は砲弾型一条壺である。320の突部は口縁部に接し、刻目は小さい。内外面ともに条痕が残る。321は直線的な胴部で、突部は口縁部にわずかに被さっている。刻目は小さい。外面は条痕が顕著に残る。322はA 5グリッドで潰れた状態で出土した(図版3-6)。刻目は指頭による大きなもので、突部下には横方向の条痕が残る。胴部下半は縦方向の板ナデ、内面にはわずかに条痕が残る。外面には煤が付着している。323は壺の台形状底部である。322と同一個体の可能性がある。326は屈曲二条壺である。刻目は小さめの断面V字形のものである。口縁部と屈曲部の間には横方向の条痕が残り、胴部には斜め方向の擦過痕が見られる。328・330ともに底部外面はケズリにより上げ底となっている。331は夜白式の壺である。外面は非常に丁寧な研磨を施している。頭部内面は研磨、肩部内面はケズリである。



第19図 4層出土土器実測図 (1/3)



第20図 5層出土土器実測図① (1/3)



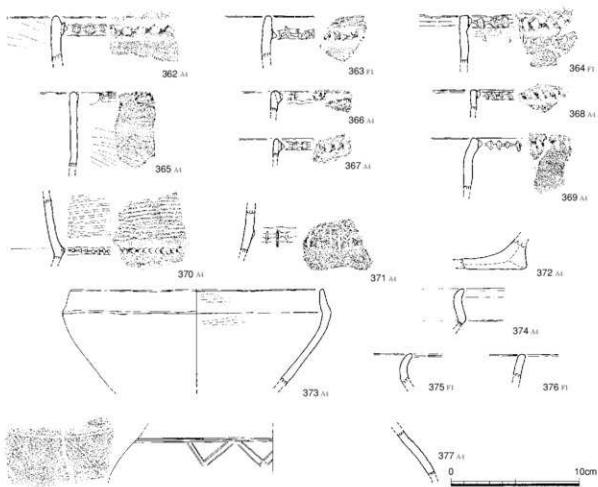
第21図 5層出土土器実測図② (1/3)

#### 5層出土土器 (第20・21図)

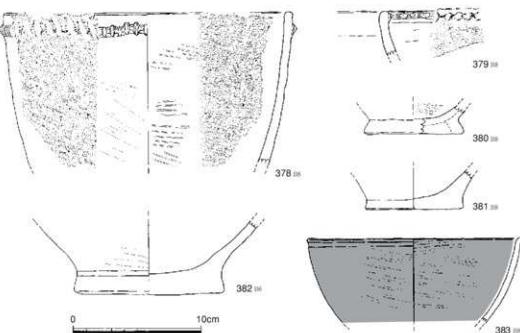
SD02の覆土である。332・333は素口縁の深鉢である。332は内外面に擦過痕が見られる。復原径は不確実である。333は内面及び口縁部外面を丁寧に研磨している。334～338は砲弾甕、339～343は屈曲甕である。334も復原径が不確実である。337・338は刻目施文の際のヘラが突帯下にまで及んでいる。340は器壁の厚い屈曲甕で、口縁端部が若干外反し、非常に角張っている。内面は丁寧なヨコナメで稜線が生じている。343は屈曲部破片であるが、天地が逆の可能性が高い。344～351は底部である。344はケズリにより上げ底となっているが、縁の接地部分には木葉痕が見られる。345は上げ底の著しいものである。352～356は浅鉢である。352は屈曲部から口縁部が短いもので、口縁部が鋭く湾曲して外反する。内外面ともに研磨を施す。353は352に比べて湾曲が緩い。354は屈曲部、355は胴部である。356は波状口縁をもつ浅鉢と考えた。小片のため器種・傾きは心許ない。357は椀形土器である。内外面に丹塗りを施す。口縁端部外面にはわずかに沈線状の窪みが見られる。358～361は盃である。358は直立気味の口縁であるが、小片のため傾きは不確実である。361は盃の胴部で、3条の沈線を有する。

#### 3層、5層出土土器 (第22図)

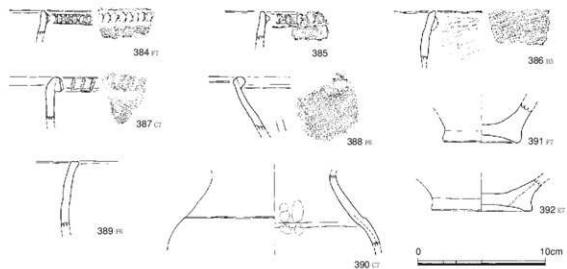
3層と5層を分層する以前に取り上げたもの、トレンチ出土のものなどである。362～368は砲弾甕である。364は幅2 mm程度の棒あるいは板状工具による施文の痕跡が突帯下部に残る。369は板付粗形甕である。口縁部がわずかに外反し、端部に刻目を施す。370・371は屈曲甕である。370は条痕が明瞭に残る。373・374は浅鉢である。373はほとんど湾曲せずに内傾する口縁を有する。内面に研磨の痕跡が残る。374は口縁端部がわずかに外反する。375～377は盃である。377は肩～胴部の破片で、沈線による複線山形文を施す。



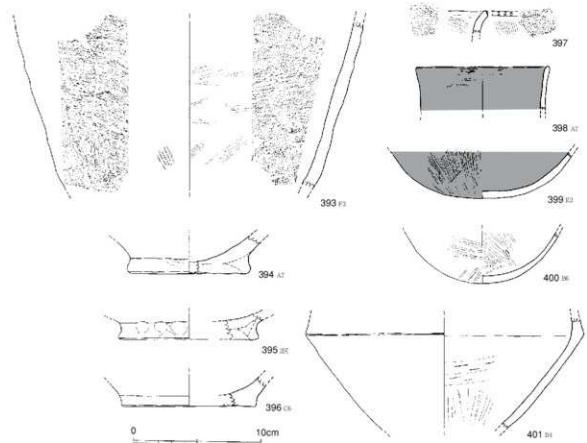
第22図 3、5層出土土器実測図 (1/3)



第23図 6層出土土器実測図 (1/3)



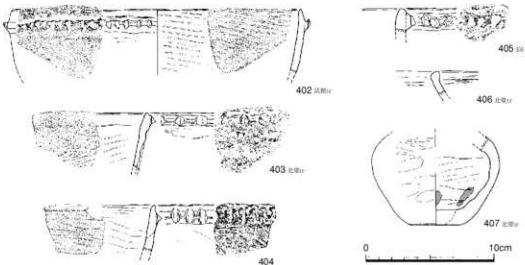
第24図 8層出土土器実測図 (1/3)



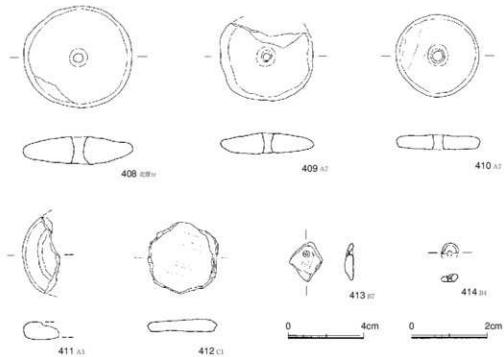
第25図 砂層出土土器実測図 (1/3)

#### 6層出土土器 (第23図)

B 8 グリッド付近で検出した腐植土層（6P層）である。378は砲弾甕で、口縁部から1cmほど離れた位置に突帯を貼り付ける。棒状工具による断面U字形の大きく深い刻目を施す。外側調整は板ナデ、内面は条痕が残る。外面には大量の煤が付着している。379は屈曲甕で、内外面は丁寧なナデを施す。刻目は貝殻によるものと思われる。380～382は底部である。382は大型のもので、内面に



第26図 層位不明土器実測図 (1/3)



第27図 土製品・玉実測図 (1/2, 1/1)

煤が付着している。383は椀形土器で、内外面を研磨している。口縁下には沈線上の浅い窪みが見られる。

#### 8層出土土器 (第24図)

384～387は砲弾型の口縁部である。384は楕円形の刻目が整然と並ぶ。386は突帯が剥落している。388は小片のため不確実であるが、屈曲型の口縁部と判断した。389は壺で、直立気味の口縁部である。390は壺の頸部～胴部で、口縁を欠く。外面の肩部には緩い段がある。391・392は底部で、ともに上げ底である。

#### 砂層出土土器（第25図）

393は粗製深鉢の胴部である。外面とも粗雑な調整である。394～396は底部である。397は口縁が外反する板付式壺で、外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。端部には刻目を施す。398は壺の口縁で、器壁は薄く直立する。外面ともに丹塗りを施し研磨している。399は壺の底部で、丸底のものである。外面ともに丹塗りを施し研磨している。400も丸底の底部であるが、大きさからすると椀形土器の可能性もある。同じく内外面を研磨している。401は浅鉢の届曲部～胴部である。外面は摩滅のため調整不明瞭、内面は研磨とケズリである。

#### 層位不規土器（第26図）

トレンチや検出時に出土したものである。402～405は砲弾甕である。402は口縁から1cmほど離れた位置に突き穴を貼り付け、断面V字形の刻みを施す。内面には条痕が明瞭に残る。403は指頭による刻目で間隔は疎らである。404は棒状工具による断面U字形の刻目である。突き穴が著しい。405は貝殻で施したものである。器壁は厚く、刻目も大きい。406は浅鉢の口縁部であろうか。外面は研磨を施す。407は小壺の胴部である。内面には丹の跡が残る。415は大型壺の口縁～胴部で、試掘トレンチより出土した。写真のみの掲載である。外面は研磨を施し、内面は摩滅で調整不明。

#### （2）土製品・玉（第27図）

408～411は土製紡錘車である。408は完品で直径5.7cm、409は直径5.0cm、410は完形で直径4.4cmである。412は土製円盤と思われる。413は穿孔のある土器片である。408は北壁トレンチからの出土、409～413は3層からの出土である。414は天河石（アマゾナイト）の小玉である。B4グリッドで3層掘削中に出土した。薄い青緑色を呈し、1/2を欠失している。穿孔は両側から施されている。

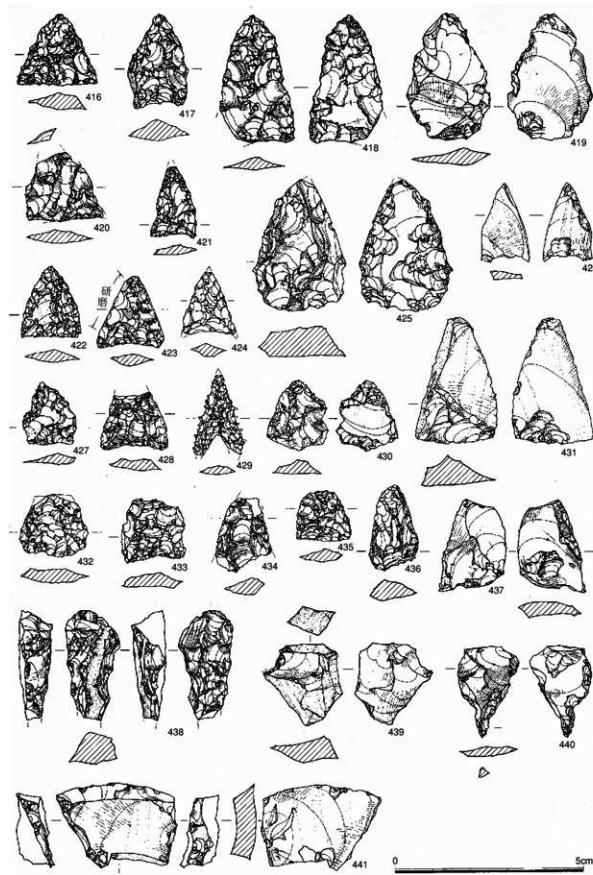
#### （3）石器（第28図～第31図、第1表）

本調査では大陸系磨製石器のほか、多量の黒曜石剥片が出土した。土器と同様に3層からの出土が大部分を占め、4層以下からの出土は少量である。出土石器の数量は、磨製石剣1点、磨製石斧7点（蛤刃4点、扁平刃3点）、安山岩製石錐1点、安山岩製削器1点、黒曜石製石器および剥片は531点である。

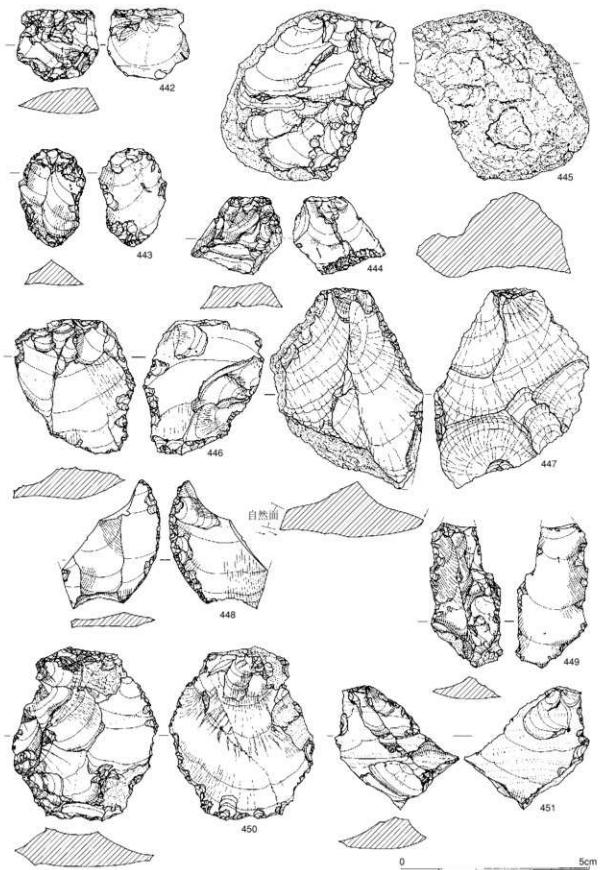
黒曜石製石器・剥片の内訳は、打製石錐（未製品含む）22点、石錐2点、彫器1点、削器9点、搔器3点、刃器3点、台形状石器1点、ノッチ状1点、剥片石器3点、使用痕剥片48点、石核・残核51点、剥片・削片・碎片386点、原石1点である。出土黒曜石の総重量は1999.26g。図化した石器については観察表（第1表）を作成したので、個別の記述は省略する。写真のみの掲載であるが、黒曜石原石（469）が1点出土している。

第1表 出土石器観察表

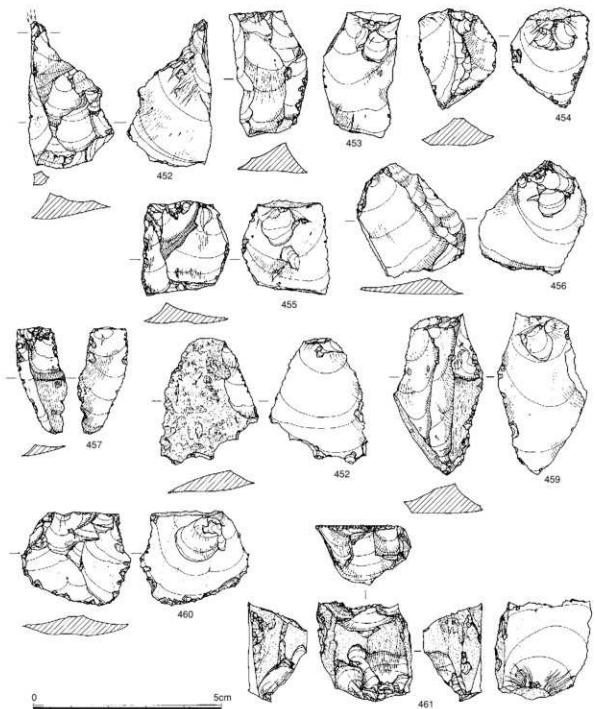
番号	貯蔵	種類	石種	規格量 (cm)	重量 (g)	備考
416	A7	打削石器	黒曜石	19.0 × 2.0 × 0.45	135	直曲とも比較的単純な打削加工。基部平滑、椎状面凸レジス状。
417	Z7	打削石器	黒曜石	2.5 × 1.6 × 0.56	125	直曲とも比較的単純な打削加工。基部平滑に凸レジス状、椎状面凸レジス状。
418	A6	打削石器	黒曜石	3.8 × 1.9 × 0.36	229	比較的丁寧な打削加工。基部平滑に内凹気泡。
419	C2	打削石器	黒曜石	3.2 × 2.2 × 0.47	307	角錐形の右斜面削除を主軸とし、直曲左斜面削除。表面から一矢方向、打削石器製造?
420	B8	打削石器	黒曜石	2.0 × 1.8 × 0.34	125	直曲とも比較的丁寧な打削加工。椎状面-先端欠損、椎状面凸レジス状。
421	Z7	打削石器	黒曜石	1.9 × 1.2 × 0.26	106	直曲とも比較的丁寧な打削加工。先端欠損、基部平滑に近い凸面、椎状面凸レジス状。
422	D1	打削石器	黒曜石	1.9 × 1.8 × 0.35	108	直曲とも比較的丁寧な打削加工。基部平滑、椎状面。
423	C8	打削石器	黒曜石	1.92 × 1.78 × 0.31	105	直曲とも比較的丁寧な打削加工。凸面先端に研磨、基部平滑に内凹気泡、椎状面凸レジス状。
424	B8	打削石器	黒曜石	1.92 × 1.45 × 0.34	102	直曲とも比較的丁寧な打削加工。凸面先端に研磨、基部平滑に内凹気泡、椎状面凸レジス状。
425	H7	打削石器	黒曜石	3.5 × 2.8 × 0.71	605	不定形削除を主軸とし、直曲を凸削除して削り取し、縦刃に弱い左斜面削除加工。基部外反きの凸面、椎状面削除。
426	I2	打削石器	黒曜石	2.0 × 1.30 × 0.25	104	不定形削除を主軸とし、直曲を右斜面削除して削り取し、縦刃に弱い左斜面削除加工。基部平滑に内凹気泡。
427	C8	打削石器	黒曜石	1.67 × 1.41 × 0.32	102	直曲とも比較的丁寧な打削加工。椎状面-先端欠損、椎状面凸レジス状。
428	A6	打削石器	黒曜石	1.90 × 1.8 × 0.31	106	直曲は凸面、直曲とも比較的丁寧な打削加工。基部平滑に近い凸面、椎状面凸レジス状。
429	H6	打削石器	黒曜石	2.13 × 1.35 × 0.22	102	直曲とも比較的丁寧な打削加工。椎状面-先端欠損、椎状面凸レジス状。
430	S032	打削石器	黒曜石	1.80 × 1.60 × 0.32	106	不定形削除を主軸とし、若狭かの-先端で加工済みに削り取っている。基部平滑に近い凸面、椎状面凸レジス状。
431	H1	打削石器	黒曜石	3.05 × 2.05 × 0.71	344	直曲削除の右斜面削除を主軸とし、椎状面左斜面削除して削り取る。先端に一次削除で削り取っている、未削き?
432	Z7	打削石器	黒曜石	1.98 × 1.82 × 0.36	107	直曲削除か、直曲とも比較的丁寧な打削加工。基部外反きのみの凸面、椎状面凸レジス状。
433	B8	打削石器	黒曜石	1.7 × 1.7 × 0.38	125	直曲削除か、直曲とも比較的丁寧な打削加工。基部平滑に近い凸面、椎状面凸レジス状。
434	I7	打削石器	黒曜石	1.90 × 1.52 × 0.42	113	直曲削除の右斜面削除か、椎状面-先端欠損、基部平滑に近い凸面、椎状面凸レジス状。
435	A6	打削石器	黒曜石	1.30 × 1.45 × 0.34	106	不定形削除の右斜面削除か、椎状面-先端欠損、基部外反き平手半握、椎状面凸レジス状。
436	A5	打削石器	黒曜石	1.20 × 1.30 × 0.25	102	内側斜面の右斜面削除を主軸とし、椎状面削除か、先端削除。椎状面凸レジス状。
437	B6	打削石器	黒曜石	2.45 × 1.8 × 0.4	125	内側斜面の右斜面削除を主軸とし、直曲を右斜面削除して削り取る。先端削除で削り取っている、未削き?
438	C6	打削石器	黒曜石	2.0 × 1.40 × 0.36	104	直曲は凸面が削り取る型で直曲を主軸とし、直曲削除によって削り取る。先端削除で削り取っている、未削き?
439	A6	打削石器	黒曜石	1.20 × 1.30 × 0.61	102	直曲削除の右斜面削除を主軸とし、直曲左斜面削除によって削り取る。先端削除で削り取っている、未削き?
440	H7	打削石器	黒曜石	2.42 × 1.62 × 0.3	111	不定形削除を主軸とし、直曲を凸面削除して削り取る。先端削除か、二矢方向で削り取る。先端削除を作り出している、直曲削除の右斜面削除を主軸とし、直曲左斜面削除によって削り取る。先端削除で削り取る。直曲削除で削り取る。直曲削除で削り取る。直曲削除で削り取る。
441	A3	2 打削石器	黒曜石	2.27 × 2.17 × 0.62	535	直曲削除が主軸とし、直曲左斜面削除によって削り取る。先端削除で削り取る。直曲削除で削り取る。直曲削除で削り取る。
442	-	削器	黒曜石	1.92 × 1.78 × 0.36	116	ツバクリの削り跡を主軸とし、先端削除。直曲削除から内凹面の丸く削り取る。二矢方向で削り取る。刃作り作り出している。
443	B3	削器	黒曜石	2.68 × 1.78 × 0.61	266	不定形削除の右斜面削除か、直曲を削り取る。先端削除で削り取る。刃作り作り出している。
444	B3	削器	黒曜石	2.30 × 1.94 × 0.61	236	内側斜面と主張する丸く削り取られた直曲削除によって削り取る。直曲削除から内凹面の丸く削り取る。刃作り作り出している。成井削離で裏面として、平行な直曲が直角の直角である二矢方向で削り取る。刃作り作り出している。バッヂの直角削離か、直角削離で裏面代用の所。
445	B8	3 削器	黒曜石	4.00 × 4.00 × 2.1	298	直曲の先端から一矢方向に削り取る。直曲削離か、直角削離かのどちらか削り取る。
446	-	2 削器	黒曜石	3.00 × 2.20 × 0.80	120	直曲の先端から一矢方向に削り取る。直曲削離か、直角削離から一次削除で削り取る。刃作り作り出している。
447	D7	3 削器	黒曜石(有茎片)	5.3 × 4.00 × 1.4	102	直曲削離が主軸と定形削離をして削り取る。直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
448	-	1 削器	黒曜石	3.80 × 2.00 × 0.38	266	直曲の削離を主軸とし、直曲に。直曲に。直曲削離から一矢方向で削り取る。刃作り作り出している。
449	A7	3 削器	黒曜石	3.82 × 1.83 × 0.61	121	直曲削離と主張する丸く削り取られた直曲削離の削離面に、直曲削離から二矢方向で削り取る。
450	D2	3 削器	黒曜石	4.00 × 2.00 × 0.98	163	直曲削離と主張する丸く削り取られた直曲削離の削離面に、直曲削離から一矢方向で削り取る。刃作り作り出している。
451	B8	6 削片刮削	黒曜石	1.30 × 0.25 × 0.09	616	不定形削離の右斜面削除か、直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
452	-	2 削器?	黒曜石	3.00 × 2.25 × 0.62	361	直曲削離の右斜面削離を主軸とし、直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
453	B2	3 削器	黒曜石	3.38 × 2.10 × 0.71	441	直曲削離の右斜面削離を主軸とし、直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
454	E3	2 使用痕削片	黒曜石	2.70 × 1.20 × 0.78	316	直曲削離の右斜面削離を主軸とし、直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
455	H7	3 削器	黒曜石	2.35 × 2.35 × 0.59	116	直曲削離の右斜面削離を主軸とし、直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
456	A6	2 使用痕削片	黒曜石	2.10 × 2.00 × 0.44	335	不定形削離の右斜面削離を主軸とし、直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
457	C3	3 使用痕削片	黒曜石	2.80 × 1.33 × 0.39	109	直曲削離の右斜面削離を主軸とし、直曲削離によって削り取る。
458	Z5	- 使用痕削片	黒曜石	3.38 × 2.00 × 0.46	140	直曲削離の右斜面削離を主軸とし、直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
459	C2	2 削器	黒曜石	4.20 × 2.26 × 0.72	624	直曲削離の右斜面削離を主軸とし、直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
460	H2	2 削片刮削	黒曜石	2.80 × 2.00 × 0.60	307	直曲の右斜面削離の右斜面に、直曲削離から削り取った直曲削離の削離面に、直曲削離によって削り取る。
461	H2	3 直柱	黒曜石	2.40 × 2.00 × 1.59	102	直曲の右斜面削離の右斜面に、直曲削離から削り取った直曲削離の削離面に、直曲削離によって削り取る。
462	A7	2 手斧(櫛手)片	青石	6.60 × 2.25 × 1.1	144	直曲-直柱で手斧(櫛手)片に整備した後へ入念な研磨を施す。椎状面は直曲によって仕上げている。
463	S2	2 磨平刃石斧	黒曜石	6.45 × 2.0 × 1.20	480	研磨した直柱から直曲へと直曲削離によって削り取られた直曲削離の削離面に、直曲削離によって削り取る。直柱の削離によって削り取る。
464	H2	3 磨平刃石斧	青石	4.20 × 1.8 × 0.80	271	直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
465	C9	2 剃刀片	青石	4.15 × 2.00 × 0.59	545	直曲も工夫して研磨を施す。椎状面から直柱へと直曲削離によって削り取る。
466	S003	2 磨平刃石斧	安山岩	120 × 6.65 × 4.9	3283	直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
467	-	3 加工工具品	安山岩	11.8 × 8.2 × 4.0	5482	直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
468	E2	3 磨削留留石斧	青石	9.1 × 5.32 × 2.2	8014	直曲削離によって削り取る。直曲削離によって削り取る。
469	B8	2 破石	黒曜石	6.0 × 5.8 × 2.7	10365	直曲削離によって削り取る。



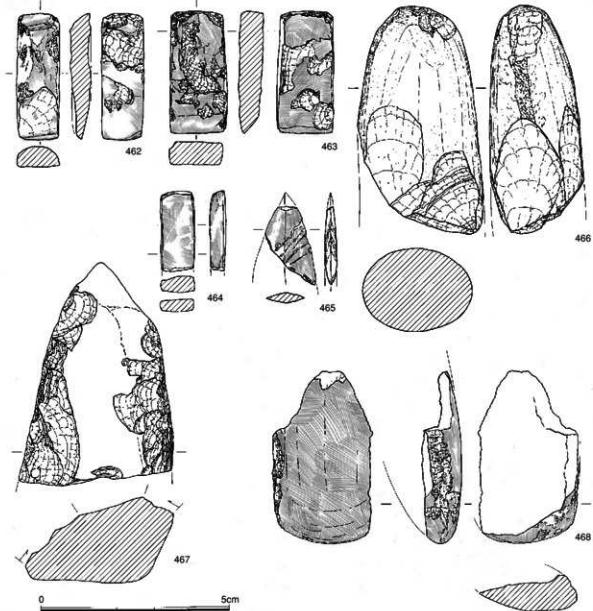
第28図 出土石器実測図① (1/1)



第29国 出土石器実測図② (1/1)



第30図 出土石器実測図③ (1/1)



第31図 出土石器実測図④ (1/1)

#### 第4章 おわりに

##### (1) 天河石（アマゾナイト）について

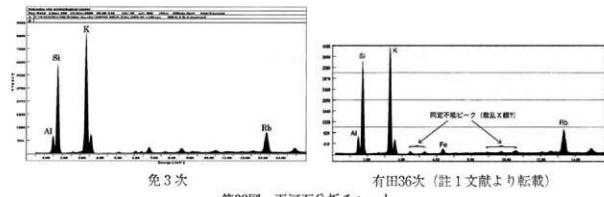
3層より出土した小玉（414）の石材を確認するため、蛍光X線による含有元素分析を行った。第32図が分析結果である。比佐陽一郎氏は有田遺跡群第36次調査出土アマゾナイトの分析を行い、アマゾナイトの特徴としてアルミニウム、珪素、カリウム、ルビジウムのピークを指摘し、特にルビジウムが他の石材では見られないほど強く検出されるとしている（註1）。免遺跡第3次資料と有田遺跡群第36次資料の分析結果は酷似しており、このことから免3次資料の石材は天河石と判明した。

これまで福岡市内において天河石は2例確認されている。ひとつは上述した有田36次のもので、弥生時代中期の甕棺上方の覆土から出土している。もう1点は今宿5次調査で確認されており、金

海式壺棺の覆土から出土している。免3次資料は夜臼式・板付式土器共伴期に該当するもので、福岡市内の例では最も古いものとなる。近い時期の事例としては、福津市の今川遺跡でアマゾナイト製の勾玉・丸玉の出土がある。

註1 比佐陽一郎2007「4、元岡・桑原遺跡群第27次調査出土石製小玉の石材について」

『元岡・桑原遺跡群9』福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第963集 福岡市教育委員会



第32図 天河石分析チャート

#### (2) 大洞系土器について

3層より隆線を有する壺形土器（238）が出土したが、北部九州において隆線重弧文土器の出土例は少ない。類例としては、福岡市内では雀居遺跡（第10次・12次）、板付遺跡（第60次）、その他では佐賀県唐津市大江前遺跡、佐賀県佐賀市久保泉丸山遺跡など10例に満たないようである。免3次資料は特徴から大洞C式併行との御教示を得た。出土した3層は夜臼式・板付式土器共伴期であるが、時期幅はあるように思われる。形態的には、頸部と肩部の境に横方向の隆線1条、弧状の隆線2条を持つ点で大江前遺跡例と似ている。その他の例は横方向の隆線ではなく沈線となっている。

#### (3) 圧痕資料について

出土土器には種子圧痕の見られる土器片があった。土器片を全て観察した山崎純男氏によると、7点にイネ・アワ・キビなどの圧痕が確認された。図化した土器のうち、340には胎土の中にイネの種子が、381には種類不明の種子が見られる。382には底部外面にイネの圧痕が見られる。その他、図化していない土器片にアワもしくはキビ、種類不明の圧痕を持つものが4点ある。

#### (4)まとめ

免3次地点は過去の周辺調査と同じく沖積地の調査であったが、本地点では湧水もなく杭列や堰といった構築物・水田遺構も確認されなかった。本調査地点は自然流路の窪みと谷部が、湿地状態で徐々に埋没していく過程で土器が堆積したものと思われる。また、谷の落ち際にには投棄されたと思われる土器もあることから、本地点南西側の微高地には集落が存在していた可能性が高いが、削平により失われたものと思われる。谷部からの出土遺物で見ると、4層以下は板付式土器をほとんど含まず、器面調整も粗雑なものが多い。粗製深鉢、橢形土器、直口ぎみの壺などが出土しており、3層に比べて古相を示すように思われる。4層以下は突帯文土器単純期、3層は突帯文土器・板付式土器共伴期に当たると考ええる。出土遺物には韓半島からの搬入品である天河石や、東日本の影響を受けた隆線を有する土器が見られ、遠隔地との交流を窺うことができる。



1. 1区砂層上面全景（北より）



2. 1区砂層上面全景（西より）



3. 1区完掘状況（北より）



4. 1区完掘状況（西より）



5. 2区砂層上面全景（東より）



6. 2区完掘状況（東より）

図版2



1. 北壁土層（南東より）



2. A-6～C-6 土層（南より）



3. B-3～F-3 土層（南東より）



4. 試掘トレンチ西壁土層（南東より）



1. SD01完掘状況（南より）



2. SD02（北より）



3. SD03完掘状況（北より）



4. SD03完掘状況（南より）

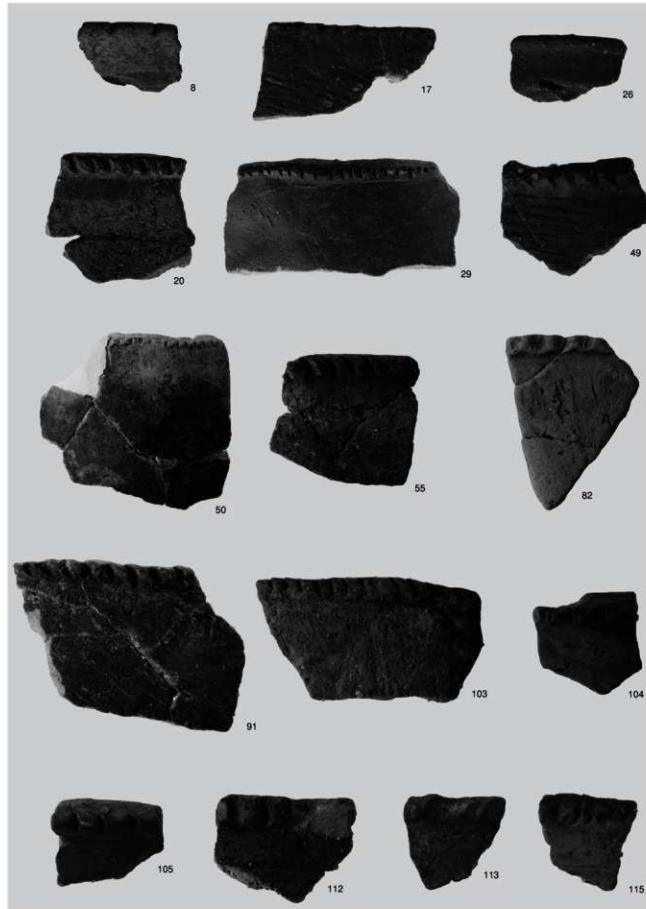


5. 埋設土器出土状況（北より）

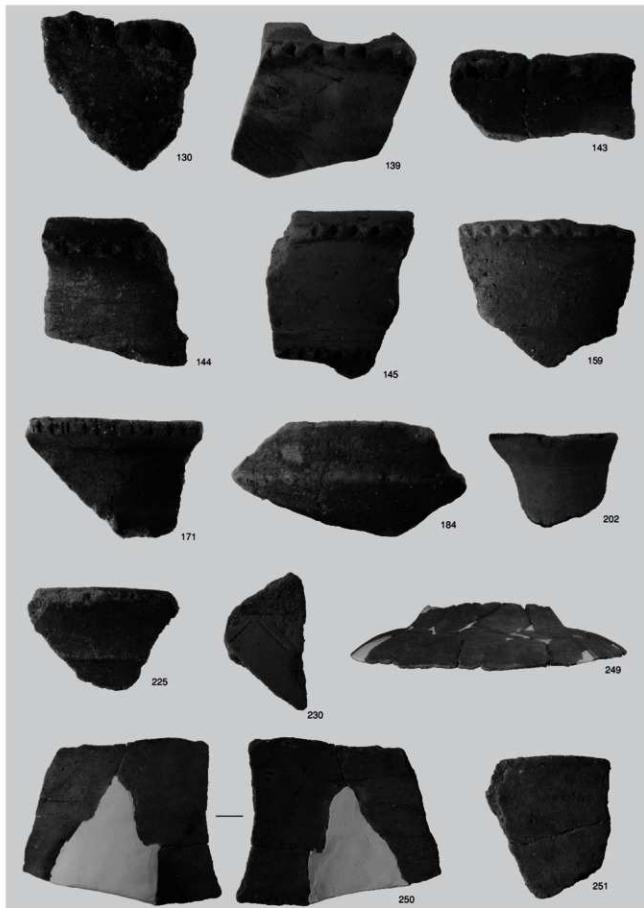


6. 322出土状況（北より）

図版 4



出土遺物 I (縮尺不同)

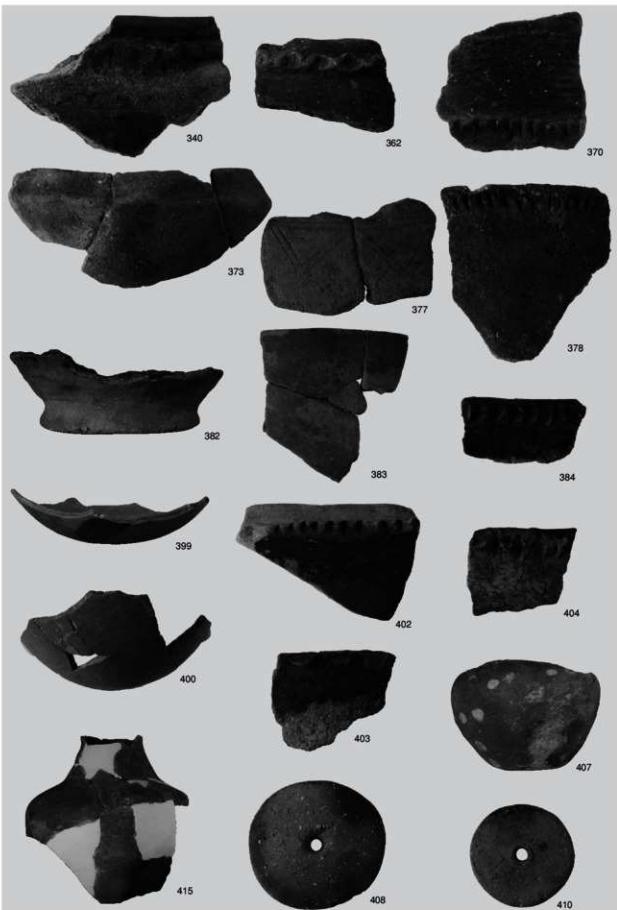


出土遺物Ⅱ（縮尺不同）

図版 6

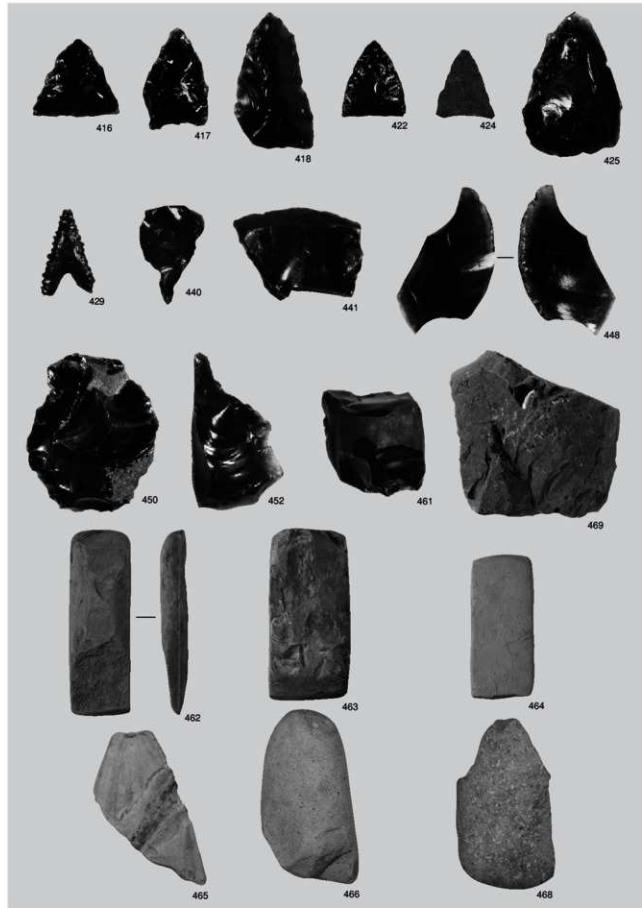


出土遺物Ⅲ（縮尺不同）



出土遺物IV（縮尺不同）

図版 8



出土遺物 V (縮尺不同)

## 報告書抄録

ふりがな	めんいせき 2			
書名	免遺跡 2			
副書名	第3次調査報告			
巻次				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	第1059集			
編集者名	今井隆博			
編集機関	福岡市教育委員会			
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1			
発行年月日	2009年3月31日			
調査機関	2007年5月14日～2007年6月29日			
調査面積	250m <sup>2</sup>			
調査原因	河川改修工事			
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東緯
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)
免遺跡 第3次	福岡県福岡市早良区 賀茂4丁目	40137	0318	33° 33' 10" 130° 20' 20"
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
免遺跡 第3次	集落 遺物包含地	弥生	埋設土器 自然流路 遺物包含層	突蒂文土器 板付式土器 磨製石器 剥片石器 天河石
				谷部、自然流路から刻目突蒂文土器を中心とする多量の遺物が出土した。

## 免 遺 跡 2

—第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1059集

2009年（平成21年）3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
(092) 711-4667

印刷 松影堂印刷株式会社  
福岡市博多区吉塚5丁目13-40  
(092) 622-7971